

# 感染症と生活

## —未来のためのしなやかな紐帯の構築—

A better life

岡田和成, 兜坂和美, 福田友香, 龔一帆, 王晓軻, 羅蜜蜜

新型コロナウイルス感染症が流行し始めてから、失業率の増加、自殺者数の増加が問題となっている。さらに、この自殺者の増加率は男性よりも女性の方が高くなっている。コロナ禍と女性の生活に関する量的研究の論文はいくらかあるが、コロナ禍における女性の内面や行動の背景までも明らかにした質的研究の論文は少ない。本研究では、インタビュー調査を行い、対象となる女性の内面や発言の背景を調査し、得られた声をもとにワークショップを行うことで、様々な人々と情報共有や実態把握の場を設け、困難な状況を克服した人の持つ傾向を明らかにする。

**Keywords :** 感染症, 生活, コロナウイルス, 女性, インタビュー, 人間関係

### 1. プロジェクトの背景及び目的

#### 1. 研究の背景と目的

2020年に新型コロナウイルス感染症が蔓延し、人々の生活や心理にかなりの影響を及ぼした。Horita & Moriguchi (2022)<sup>1)</sup>によって分析された厚生労働省の死亡統計データの結果によると、2020年度の人口10万人あたりの自殺者数は、2009年から2019年までの推移に基づく予測値よりも、男性で17%、女性で31%高い数値になった。また、自殺者数の増加は失業率の増加とも関連していることが明らかにされた。

川面充子は新型コロナウイルスが女性に及ぼす影響の実態把握のために、女性を対象としたアンケート調査<sup>2)</sup>を実施した。調査の結果は、働き方の変化に関して、「あまり変わらない」が48.8%と一番多く、それ以外、「就業日数が減った」、「在宅勤務が増えた」、「収入が減った」などの回答が見られた。また、生活上の変化について、緊急事態措置期間(2020年4月～5月)と調査当時(2020年10月)の2つの期間ともに、コロナ禍前と比べて、「人との交流機会が減った」、「感染への不安が増えた」、「外出できないことに対するストレスが増えた」という回答が多く見られた。さらに、女性に対する支援策については、「相談できる場所の情報提供」や「リモートの活用」などに関する回答が多かった。また、大阪府府民文化部男女参画・府民協働課も、2020年7月に大阪府に在住・在勤・在学の方合計1099人を対象にアンケート調査<sup>3)</sup>を行い、川面が実施したアンケート調査と類似した結果が見られた。その他にも、内閣府はコロナ禍の女性への影響と課題に関する研究会を開催している。したがって、ある程度量的研究は

行われており、コロナ禍の女性への影響は先行研究によって明らかになってきている。

本研究では、インタビューにより、対象となる女性の内面や発言の背景を調査し、ワークショップを実施する。その中で、実際の声を通して実態を知ることにより、困難な状況を乗り越えていく人の特徴を明かにするための質的研究を行う。また、その共有の場を設け、様々な意見をいただくことで今回のPBLの研究を行った。

#### 2. 対象と方法

本研究では、以上の目的を達成するために20代～80代の主に姫路市に住む女性約20名を対象にインタビュー調査を実施した。対象者1人につき1時間程度で、最初の緊急事態宣言が出される1週間前から半年後までの全体的な生活の変化、コロナ禍での仕事、心情の変化、人間関係、新しく始めたことなどについて、半構造化インタビューを行った。さらに、その結果を用いてワークショップを行った。ワークショップでは、延べ50名の参加者同士がコロナ禍の自分の生活やその時の心情などを共有したり、今後新たな感染症によって社会が混乱してしまったときに、どのように対応していくべきかなどを話し合ったりした。その後、ワークショップでの参加者の発言と事後アンケート、インタビューでの発言の関連性などを分析した。

姫路市に住む方を対象とした理由は、姫路市は緊急事態宣言の発令期間が岡山市よりも長く、新型コロナウイルスによる社会的・経済的影響をより大きく受けている方が多いと想定したためである。

### 3. 結果

インタビューを受けて得られた声をまとめる。

#### ①家族との関係性

- ・両親と一緒にご飯を食べるようになった。
- ・大学のオンラインにより、娘が家にいる時間が増えた。
- ・息子の友達が家に泊まることに不満がある。

#### ②仕事の変化

(飲食店)

- ・内装やレシピ、営業時間を変更した。
- ・支援はあるが、自分たちで何とかしなければならない。
- ・年配の方やサラリーマンのお客さんが減少。(講師業)
- ・授業形態や教材の変更。
- ・オンライン授業の増加により、先生の数が減少。
- ・給料の減少。

#### ③周囲との付き合い方

- ・他の経営者や同じ悩みを抱えている人との連絡。
- ・似たような業種の開いているお店に行き、支援金などの情報もらう。
- ・電話の頻度が増加し、会う頻度は減少した。
- ・友人との付き合いのリセット。

#### ④オンラインとオフラインでのつながり

- ・同業者とオンラインに対応した業態にするために勉強会を開くなどして、探り探り行った。
- ・SNSを通じて共通の趣味をもつ新しい人間関係を作り上げ、広げていった。
- ・オフラインでのつながりを求める人も多い。

#### ⑤新しく始めた・始めたいこと

- ・猫を飼う
- ・山登り
- ・植物を育てる
- ・断捨離
- ・再就職
- ・いずれは田舎で悠々自適に暮らしたい

### 4. 考察

本研究は、コロナ禍における女性への影響に関する先行研究をもとに、女性の生活環境や心理的な面の変化をインタビューで聞いてきたが、その中や、男女を問わないワークショップ参加者の発言を通して、その変化は女性のみでなく、周りを取り巻く人々や環境にも大きく影響を受けていることが分かった。

4-1 インタビューやワークショップ参加を依頼する段階で、なるべく多様な属性の方から話を伺いたいと思い働きかけをしたが、結果的に協力者には偏りが見られた。協力者の大半は専門学校・大学卒以上の学歴を持ち、男女問わず専門職の有資格者、会社・店舗などの経営者、ついで公務員であり、会社

員、パート、専業主婦などは少数であった。とりわけ資格を活用し働く女性の個人事業主は、早い段階から積極的な協力表明をしてくれた。協力者がこのような結果になったのは、日常的にコミュニケーションの機会が多く広範にわたることや、業務を遂行する上で世相に敏感であり社会への興味関心が強いことなどが考えられる。

4-2 個人事業主の方の仕事の形態について、社会的な関係よりもパーソナルな関係に基づいてなされる決断が多く見られた。実際の発言に以下のものがあつた。

・「東京の都内とかは、やっぱり大きなサロンさんは、もう自主的に閉めているところが多かったけど、うちはもう個人店やし、まあ国が開けていいっていうから、まあ開けようかなって。けど、まあ1日目、2日目ともうどんどんキャンセルだらけやったんで。」(美容室経営)

・「うちはそれにひっかかるのに入ってなかったんで、開けました。開けましたけど、お客さんがみな規制かかるんで、自営されている方は(中略)まったく来られなくなりました。(開けてたけれど)休業状態です。」(ジム経営)

・「私の場合は自宅だったので、もうあの、家賃も発生しませんし...やっぱり何より信用が、あのお一番なので、もうやっぱりうつしてはいけないうのがありましたし。」(美容関係)

・「(行動制限は)暗黙の了解です。まあ、絶対とは言われてはいけけれど、やっぱりその迷惑をかけるはいけないうちいち自分で思うことと...」(教室経営)

・「(ワクチン接種を)受けないとお客さんの施術はできないなと思ったので。やっぱ2回目も3回目も、私熱が出てね、ひどかったんですけど、やっぱりもう、受けないと...選択はできるんですけども、受けないとダメと追い込まれている職業っていっぱいあると思うんですよ。」(美容関係)

・「感染対策、これだけしてますというのは、いつもずっと発信していたら安心やから。で、席開けてます、こんな大きい加湿器買いましたとかいうのは、もうインスタとか。(中略)こちらからずっと発信する感じで。」(美容関係)

・「役に立ってるのかどうかは、分からないですが、なんか私自身がこんな人と会って話をしていると楽しいなあって思うので、そのつながりの場が皆さんに提供できたら良いかなあって思います。」(教室経営)

このように、個人事業主の方は、日常的に「個人(自分)」対「個人(顧客)」の関係性を構築してお

り、その都度の対応・決断を自身で考える機会が多かったことがうかがえる。休業対象にはなっていないが、万一自らが取引相手・顧客に感染させてしまった時のリスクを危惧し、自主的に休業の判断を行ったり、感染対策について SNS を活用して発信したりして、「どのように仕事を続けていくのが最善か」を試行錯誤した発言が多く聞かれた。また、ワクチン接種の動機に関しても取引相手・顧客を意識している傾向があった。これらの特徴から、薊 (2022) <sup>4)</sup>が示した「地域的セケン・他者配慮」と同様の側面が確認できた。そして、自らの仕事の社会的な意義を意識した様子がうかがえる発言もいくつもあった。

4-3 持続化給付金について、その取得の有無は情報の煩雑さから業務形態によって違いが見られた。実際の発言に以下のものがあった。

・「ずっと家にいるより…(開いているところに出かけて行って) 周りはどうか、補助金こんなあるよとか、聞いてそこで情報をもらって」(飲食店経営)  
・「個人事業主として認めてもらうための書類がめっちゃくちゃ要るんですよ。だから何回か行って追い返されて。6回、5回ぐらい返されて、心折れて」(講師業)  
・「一生懸命資料を作っても、あの、やっぱりその専門的に、しっかりとしたものを作らないと認められないじゃないですか、その。書類がね、例えば足りないとか、それに費やしてる時間が馬鹿らしくなってます。補助金は一切受けてません。」(教室経営)

自ら出かけて行って、周囲から情報を得ることができたという意見があると同時に、給付対象でありながら手続きの煩雑さや様々な業務形態の存在が想定されていないことを感じたなどの意見もあり、給付金を受けていない人も多くいた。

4-4 コロナ禍での制限については、若い世代ほど強く影響を感じており、以下のような発言があった。

・「ほんとに人生設計が崩れていくみたいな感じですね。」(妊婦)  
・「人と少し距離を置いたせいか、周りに馴染めなかった時期があったので、その時のことを思い出した。」(高校生)  
・「楽しいはずの給食でしゃべるなど言う。本来なら怒らなくていい場面で、怒らなければならないのが辛い。」(小学校教員)

若い世代の発言からは、コロナ禍で人と人との直接の出会いが難しいことや、学校現場では、コロナ前とのギャップに苦悩している様子がうかがえた。特に若い世代はコロナ禍での様々な制約によって生

活に大きな影響をうけていた。しかし、高齢者や中高年世代では、若い世代と異なる以下のような発言が多くあった。

・「(家族から出るな出るなど) 家族が...そうそう...言われたから。なんでももう、ストレスが溜まって。イイ〜とかなる。」(80代)  
・「自分が歩けるのいつまでやねんていうのが、年配の方たちの考え方です。(中略) 70代の方たちはほんとに必死。86歳の方の名言、『年寄り死ねんじや。そんなことで制限されたら困る〜。』って。ほんとにすぐそこに見えているアレやから好きなことさせてよ、旅行させてよって。」  
・「80代の方は、人生やり残しがないように、お稽古に行きますって言って来てくださるんです。」  
・「コロナ禍にこういうことになって、まさかって思うことがあるじゃないですか。もしかしらこのレッスンが最後になるかもしれないって言う思いでやってるので、すごい楽しいんですよ。楽しいから、めっちゃ楽しいな、でもこれが最後かもしれへんて思うような感じで1コマ1コマやるようにはしてるんです。」(50代)  
・「私らたくましいなって。人間ってそうじゃないですか。不確かな世の中で生きてきて、この疫病とかなんとかって、それは絶対、神様が私らに語りかけてることなんで、そこをどうとらえて、どうやって生きていくかっていうのが、人間のテーマでしょうね。死に向かって生きてるんですからね。」(60代)

高齢者の中には、同居家族の制限への不満や孤独感、他者との関わりの持ちたさがうかがえた。その一方で、「人生」の残り時間を意識していること、ただコロナを恐怖や不安、不満と捉えるのではなく、だからこそそこに意味や意義を見出そうとする姿勢が特に中高年世代に多く見られた。そのため、世代間のコロナ禍における生活への影響は、若い世代ほど、実質的な影響の多寡に関わらず、精神的な面で影響を強く感じていたと考えられる。

4-5 女性と男性のウイルスの捉え方には違いが見られ、女性の発言は以下のようなものがあった。

・「ウイルス・菌が、目に見えないものがついてるから、やっぱり怖かったです。」(30代パート)  
・「(電車への抵抗は) めっちゃあります。最初、5分だけでも私めっちゃ嫌ですよ。椅子も、ちょっと座りたくなくて、立ってましたね。あれ、持たずに。結構、ちょっと菌が着いてそう、というか汚そうですよ。」(20代会社員)

これらの発言から、比較的若い世代の女性、それも都市部で働く女性からコロナウイルスへの嫌悪感

を示す言葉があったが、男性から同様の表現はなかった。感染そのものによる身体的な影響よりも心理的な影響の方が大きく (Taylor, 2019<sup>5)</sup>), 感染不安, 嫌悪感, 自粛ストレスは男性より女性の方がより強く感じており, 新しい生活様式の実施度が高い, (元吉, 2021<sup>6)</sup>) という調査と一致する。

4-6. コロナ禍は人とのつながりを見直す機会となり, 以下のような発言があった。

・「私の友達でもやっぱコロナを深刻に考えてしまう人と, 別に関係ない, かかっても別に風邪程度やろみたいな感じに分かれてて」(20代)  
・「広く浅く付き合っていたのが, いったんリセットされたじゃないですか。無理して人と付き合わなくてよくなった。いい面もあった気がします。」(美容関係)  
・「SNS とかで同じ趣味の人とつながったりして, かえって付き合いが広がった。」(40代女性)  
(コメントシートから)  
・「リモートで人とつながっているのに, どこか寂しさを感じていると言う内容がとても興味深かったです。だからこそ, 直接会える時にその時間を大切にしたいと強く思うようになりました。」(40代男性)  
・「人間のコミュニケーションの方法はいろいろあって良いが, やはりその根幹に肉体を介在することが不可欠だ」(50代男性)

これらの発言から, コロナ禍を人との付き合い方, 付き合う範囲を見直す機会, より凝縮された人間関係に再構築する機会だと捉えていることがうかがえる。それと同時に, SNS 等で新たな人間関係を広げていったことなども, コロナ禍をポジティブに捉えた人の特徴として挙げられる。また, オンラインでの人とのつながりも意義があると捉える一方で, 直接人と会うことの重要性やコミュニケーションの要素としてリアルのつながりの重要性を再認識したという特徴も見られた。これらの特徴から, 仕事や日常生活での人間関係とは別の人間関係を構築する, または複数のコミュニティをもつことによって, 新しい情報を得る機会を自ら獲得したり, ストレス発散の場となりうるコミュニティをもったりすることができれば, 経験したことのない状況に直面しても, ポジティブに捉えることができるようになる傾向が読み解ける。

## 5. 展望

本研究の成果は, コロナ禍における女性の自殺率の増加問題を出発点として, コロナ禍における人々の心情の変化やコロナ禍において様々な制限がある

中でも, 物事をポジティブに捉えて困難を乗り越えていく人に対してインタビュー調査, ワークショップの開催を行い, 今後, 予測していない困難な状況に直面しても立ち向かっていくことができる力の要素を明らかにすることができた点である。特に, 専門的な職業であること, 新しいものを受け入れてみようという積極的な意欲や姿勢をもっていること, 仕事と生活がゆるいつながりをもっていること, 情報や感情を共有する場をもっていること, 状況をポジティブに捉えて, 「人生」を見つめ直す機会と捉えたことなどである。

今回はインタビュー調査の結果を用いてワークショップを実施し, コロナ禍を乗り越えていく個人の意見を共有する場の提供を行ったり, 様々な人のインタビューでの発言をもとにして新たな困難に直面した際にどのような力を身につけていく必要があるかについて議論する機会を設けたりした。しかし, 今回実施したようなワークショップにとどまらず, 学校教育においても今回得られた結果や考察をもとにして, 新たに直面する困難な状況にも立ち向かっていくための力を育成するプログラムを考えていく必要がある。また, 生活と仕事との緩やかなつながりや様々なコミュニティを往還するつながりなどを子ども自身が作り出すことができるように, 学校教育が果たすことのできる役割についても検討していく必要がある。

## 参考文献

- 1) Horita N & Moriguchi S, 2022, “Trends in suicide in Japan following the 2019 coronavirus pandemic”, JAMA Network Open, 2022;5(3):e224739.
- 2) 川面充子, 2020, 「新型コロナウイルス禍が女性に及ぼす影響について」アンケート結果, [https://www.parti.jp/jouhou/data/03\\_r2\\_corona\\_chosa.pdf](https://www.parti.jp/jouhou/data/03_r2_corona_chosa.pdf)
- 3) 大阪府府民文化部男女参画・府民協働課, 2020, 「新型コロナウイルス禍が女性に及ぼす影響について」緊急アンケート結果, <https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/29145/00369287/kekka.pdf>
- 4) 薊理津子, 2022, 「新型コロナウイルス感染症予防行動と行動基準との関連性—羞恥を媒介した検討—」, 『心理学研究』93(5):397-407.
- 5) Taylor S, 2019, “The Psychology of Pandemics: Preparing for the Next Global Outbreak of Infectious Disease”, Cambridge Scholars Publishing.
- 6) 元吉忠寛, 2021, 「新型コロナウイルス感染症による人々への心理的影響」, 『社会安全学研究』11, 97-108.